

テキストマイニングによる「就職活動体験記」の分析

Analysis of Students' Reports about Job-hunting Experiences Using Text Mining

豊田 雄彦

Yuhiko Toyoda

竹内 美香

Mika Takeuchi

岩崎 暁

Satoru Iwasaki

菅井 郁

Kaoru Sugai

抄録 高等教育機関においても、若年者の就業と自立の支援に向けた課題は年々深刻さを増している。そのような背景において、実際に就職市場に身をおいた学生自身の体験に基づいた情報を体系化して、次年度生に取り次ぐことも有効であると考えられる。

本研究では、就職活動の既体験者(短期大学2年生)による「就職活動体験記」を就職活動「前夜」の1年生に先行学習経験のテキストとして与える可能性について検討した。就職活動・既体験者の報告記述の中に現れる頻出語と、その語を含む文脈、およびそれら頻出語とその関連語を検討した結果、「遅刻」など経年的な就職市場の変動と合わせて効果のあり方を考慮する必要のある用語も検出された。頻出語とそれらを含む文脈には記述者の感情体験が示唆されており、今後、学生が自動的に学べるデータベースを構築することにより、より分析のためのデータ取得が進むと考えられる。

キーワード 就職活動, キャリア支援教育, テキストマイニング, 若者自立, 雇用情勢

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに <ol style="list-style-type: none"> 1. 1 若年就業者を取り巻く社会的状況 1. 2 就職活動体験の共有化とピアサポートに向けたシステム整備 1. 3 テキストマイニングを用いた大学生の就業に対するイメージ分析の可能性について 1. 4 「就職活動体験記」の解析と目標 2. 本研究の方法 <ol style="list-style-type: none"> 2. 1 対象者と時期 2. 2 「就職活動体験記」からの頻出語抽出について 3. 「就職活動体験記」の解析結果 | <ol style="list-style-type: none"> 3. 1 頻出語の分析と年度ごとの変化 3. 2 擬似体験は自らの活動に生かされるか「遅刻」というキーワードに注目して 4. 考察 <ol style="list-style-type: none"> 4. 1 頻出語の年度ごとの変化 4. 2 キーワードの出現推移と就職活動文脈上の変化とその対応について 5. 今後の課題 <ol style="list-style-type: none"> 5. 1 「就職活動体験記」活用の有用性 5. 2 学習ポートフォリオの蓄積とデータベース有用性と活用に向けて 6. 引用文献・参考文献 |
|--|--|

1. はじめに

1. 1 若年就業者を取り巻く社会的状況

今日、若年者の就業と自立の支援は、高等教育機関において大きな課題のひとつとなっている。厚生労働省『生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会報告書』（平成19年）によると、労働市場における若年労働力人口の減少に歯止めがかからない状況が続く一方で、フリーター（フリーランス・アルバイト）もしくはフリー・アルバイトが語源と言われるが、和製英語として造語された後、現在の就業スタイルの一つを表現するものとして定着した呼称）、もしくはニート（こちらも和製英語であり、Not currently engaged in Employment, Education or Trainingの略称と言われている）の推定人口に改善の兆しが示されないことを大きな問題として指摘している。企業等に就職した人の3年以内の離職率は中学卒業者で67.3%、高等学校卒業者で44.4%、短期大学等卒業者で42.9%、大学卒業者で34.2%（*1）という数値を示している。高い早期離職率も、今日の若年者就業の問題を顕著に象徴していると考えられている。

このような実情を生み出す背景にある問題点はいくつか指摘されている。その中でも、学校教育、特に大学教育の場面で醸成された就業イメージと卒後の現場で体験される現実との差異が大きいことはよく指摘されることである。従来、学校教育の課程においては就業イメージの醸成を促すと同時に、イメージと現実の差異に遭遇した際の対処能力の獲得までを達成課題とさせることが理想であった。もちろん、イメージ訓練のレベル以上の経験を与え得ない学校教育にはキャリア支援における限界も含んでいる。就労拒否や早期

離職など、現在の若年就業者の諸問題は、現実対処能力の面での未熟さも含めて多様な要因が重層している。

若年者の就労拒否や早期離職は一個人としてはキャリア発達上の損失であるが、社会的には人的資源育成上の多大なロスと言うべきであり、公的・長期的視点の枠組みでも看過できない問題である。

大学教育の文脈で取り込まれてきた就業準備教育と、さらにそれに続く企業など実務の現場で行われるキャリア教育の間には、次のような乖離が含まれている。すなわち実務現場からは、新卒者に対して求める基礎学力やコミュニケーション能力が大卒者であっても不足していることに加え、若年就業者自らの、自身が主体的に働くりアリティの獲得そのものが著しく未達であることなどが指摘されている。一方で大学のキャリア教育に携わる側からは、このような不足への対応に困難を表明することが多い。なぜならば実務の現場から求められる人材像、ヒューマン・リソースとして新卒者が備えるべき能力・資質について、現場からの要請は頻繁に変動しているのは事実であるが、このことが教育課程を混乱させる要因となる憾みもあるからである。実務の現場がヒューマン・リソースに多様化と変動を求めるとしても、背景の市場に不断の変動が継続する以上、このことは致し方ないことでもある。しかし教育カリキュラムをその変動に連動させ続けることは非常に難しく、現実的とは言えない。従来我が国の大学等高等教育の方法と性質からすれば、実務の現場の変動をとらえたキャリア発達支援カリキュラムを実現し維持し続けるシステムは未だ「開発途上」である。我が国の大学を筆

頭とする高等教育機関は、基礎研究・基礎教育の府として機能してきた。その歴史の方が長いからである。それぞれの専攻課程において各専門領域の基礎知識と技術を身につけた人材を引き受け、各現場の必要に応える特色ある人材に育成するのは、従来は企業組織など実務現場の「仕事」とされていた。高等教育機関と現場企業のキャリア教育の役割も分化されていたのである。しかし昨今の経済・社会状況、国際市場の現状からは、実務場면을人材の教育訓練とする余裕、まして全人的な意味合いをも含むキャリア教育に傾注する人的・時間的余裕は現実にはない。それでは誰が、若年者の就業準備と長期展望的なキャリア・パス・イメージを含めた教育を担うことができるのだろうか。この課題は、高等教育機関と実務現場である企業組織の問題に留まらない。遠からず国民生活に直接影響するインフラの課題として直面する問題となる。

本研究ではこのような背景を踏まえ、学生の中に働くことへのリアリティを醸成する教育方法、特にその開発に焦点をあてる。具体的には、キャリア形成支援プログラムの開発と、そのプログラムを学生自身が自発的に有効活用することを可能にするマネジメント・システムの構築を目指す。

1. 2 就職活動体験の共有化とピアサポートに向けたシステム整備

現在、筆者らも携わる教育現場では、対人コミュニケーション能力の育成と他者サポートを通じて自己啓発・成長を促進することを目的として2007年度から開講している「学びのサポート」科目の場面で、2年生に「就職活動体験記」を作成させる試みを続けてきた。

学生（2年生）が執筆した自らの「就職活動体験記」を媒介として1年生とコミュニケーションを図ることを、この科目の対人演習課題の一つとしている。2年生の体験ケースを教材とすることで、「就職活動開始前夜」の1年生に就業リアリティを醸成させることができると考えている。

このプログラムは実施開始からすでに3年を経過している。現在、各年度の「就職活動体験記」を顧みると、このプログラムをさらに有効に機能させるべき課題が顕在化してきた。たとえば「会社説明会などに遅刻する」など、学生の体験記中に年度を超えて、いくつかの類型的な記述内容に出会うことがある。もし蓄積された体験記をもとにしたケーススタディを通し、他者（友人・先輩）の就職活動を追体験する経験が学生の中に知識として蓄積され体系化されるならば、こうした失敗談が繰り返されることも減少させることができるであろう。就職活動「前夜」の学生を、より継続的に自身の進路探索に向けて動機づけることもできるようになると期待することもできる。

どのようにすれば2年生の就職活動体験を有効に追体験させられるであろうか。現状では、科目時限の中でひとり当たりの1年生が読み込んで検討するケース数は数個に限られている。就職活動体験者の知識の全容を、すべての学生が効果的に共有するには至っていない。全てのケースを1年生に読ませることも現実的ではない。まず必要なことは、「先輩」が就職活動の過程で体験した事象の中から、全般的な概要や傾向を伝えることであろう。そのためには事前に内容を要約する方法もある。ただし、学年に在籍する学生全員に

「活動体験」の執筆を課している現状では、提出されるケースの件数も手作業処理の範囲を超えている。基本的には頻出用語を検索することで、先述の必要に対応することが考えられる。

その方法として、テキストマイニングが今回の検討課題・目的に合致する回答を与えてくれる可能性がある。テキストマイニングは、近年、PCの処理能力の向上に伴って解析手法が身近になったことから、その活用においても研究的進歩が著しい手法である。従来、社会調査データは生の回答を分類し名義的にせよ数値を付与するなどしてアフターコーディングの手続きを適用することが多かったが、数値化変換によって減衰されるナラティブ・アスペクトにも有意な情報が含まれていることに注目した研究が1990年代から社会心理学、教育心理学、マーケティングなどの分野でも目立ってきている。昨今ナラティブ・アスペクト研究が見直されている背景にも、テキストマイニングの利用可能性の拡大が1つの支援的要因となっている。すなわち再現可能性を追求するevidence based scienceと、「語り」の中に埋もれた真実を探索するナラティブ・アスペクト研究が両立する方途の一つが非構造化データから何らかの構造を抽出しようとするテキストマイニングのような手続きを適用・挿入することであったはずである。このような手法が試行されるようになった背景には研究者の座右に配置できるPC上で、この手法を運用できるようになった技術的進歩の恩恵がある。これまでは手法としての考え方はあっても、大量の非構造化データを一気に「ふるい」にかけるデバイスが調達できず、またその処理を行う研究者（マン）

とコンピュータ処理（マシン）のインターフェースの整備が追いついていなかったのが実態である。

今回の学生による「就職活動体験報告」も、自由に記述されたものであり非構造的データであるため、テキストマイニングの適用可能性がある。提出された一つ一つの「作品」を教員が集中して総括的な視点で読む過程で、一定の傾向や共通性、頻出用語を感覚的に抽出し、しかもそれら用語の間に共変性（出現の様相や動きに共通したつながりを示す様子）を感知するならば、PC上でデータを「ふるい」にかけることで、さらに正確な頻出用語と用語間の共変関係が抽出される可能性がある。

1. 3 テキストマイニングを用いた大学生の就業に対するイメージ分析の可能性について

学生の就職活動体験を記述させることは多くの大学が実施している。そうした内容をWeb上で閲覧できるようにしている大学も多数ある。しかし就職活動体験を統計的に分析している研究は少ない。こうした取り組みの中では、就職活動における社会的リアリティの形成を追った川上らの研究（川上、川浦、柴内 2007）や、テキストマイニングによって大学生が「就職しないこと」をどのようにイメージしているか検討した杉本の研究（杉本 2007）を新しい試みとして挙げることができる。

川上ら（2007）は、就職活動を通して、大学生が形成する就職活動のイメージが大きく変容していくことを捉えるために、就職活動前後の時期に2回の自由記述型のアンケート

を実施した。川上ら（2007）は、テキストの品詞分解を行い、一定の出現数をもつ語のみを抽出した。この頻出語に対し、回答者に10段階で別途求めた就職活動の進展時期のデータを目的変数として組み合わせ、判別分析を実施した。

杉本（2007）は、学生に『就職しないこと』のイメージをめぐる自由記述回答を求め、その回答に対してテキストマイニング手法を適用した解析を行った。杉本（2007）は、大学生の『就職すること』と『就職しないこと』のイメージの関係として、ある程度の対称性を確認したと報告する一方で、必ずしもその対称性が1次元的ではないことを報告している。すなわち、『就職すべき』と考えていても、『就職しないこと』に対しても受容的であるなど、就職を前にした大学生のイメージが多面的で複雑な構造を持つことを明らかにしている。この研究においては、「就職しないこと」のイメージに対する自由記述を「分かち書き」によりテキストを構成要素に分解して、大学生用の就職イメージ尺度のプロフィールに用いている。ここから対応分析（数量化Ⅲ類）を実施し、自由記述を8つのクラスターに分類している。

1. 4 就職活動体験記」の解析と目標

本研究では2007年度から2009年度に学生たちが作成した「就職活動体験記」のうちデジタルデータとして入手できたもの（表1）を集積し、その解析を行う。集積された「活動体験集」から新しいキャリア形成支援プログラムに向けた資料検索システムを構築することを最終的な目標とし、その準備過程として、学生が作成する報告文の中に頻用される用語

を抽出し、年度間の推移を概観する。頻出用語および用語間の共変の状況を探ることを通して、学生の就業を取り巻く社会的現況を推定し、活動の過程で学生の中に生起する感情体験のプロフィールを得ることを目標とする。

2. 本研究の方法

2. 1 対象者と時期

東京都下のビジネス系短期大学（通学課程）に在学し「学びのサポート」を履修する2年次生（「学びのサポート」科目は必修科目である）が、今回の分析対象である「就職活動体験記」を執筆した。対象となった学生の多くは前年度末（2-3月期）より就職活動としての説明会参加や、四年制大学への編入学のための準備活動などを開始している。「就職活動体験記」は2007年度分を執筆した学生（2006年度生）のみ先輩の体験記を読んでいない（前年に同科目が未開講であったため）群であるが、2007年度生からは先輩の体験記を元に「学びのサポート」科目での先輩との交流を経験した群となる。「就職活動体験記」の執筆課題に取り組むための前学習は、2008年度収集分のデータには反映されていることは考慮に入れるべきである。「就職活動体験記」は後期開始時に提出を求められた。2年生の就職活動は、大学の前期授業期間と夏季休業期間に集中している。活動体験記の内容も、その時期のことが多くなることが見込まれた。

本研究で分析の対象とする「就職活動体験記」はデジタルデータとして収集することができたものである。その対象者数は表1のとおり、2007年度 169名（総段落数887）、2008

年度 382名（総段落数1828），2009年度444名（総段落数1980）であった（表1参照）。

表1 分析の対象となった「就職活動体験記」

	2007年度	2008年度	2009年度
記述者数	169	382	444
総段落数	887	1828	1980

2.2 「就職活動体験記」からの頻出語抽出について

本研究においては、テキスト型データ解析ソフトウェア「WordMiner」（日本電子計算株式会社製）を用いてテキストの分かち書き、キーワード（主に名詞）の抽出を行った。キーワードにおける頻出語を調べることにより年度ごとの変化をとらえた。またある特定のキーワードをもつ段落を抽出し、その段落のキーワードとの対応分析を行うことにより、記述内容の変化をとらえた。

3. 「就職活動体験記」の解析結果

3.1 頻出語の分析と年度ごとの変化

各年度において頻出した言葉（頻出語）の上位30位までの一覧を表2に示す。キーワードを抽出する前処理として、語幹を共有する語の除外や置換といった編集作業を行うことはしていない。「構成要素数」とは全テキストにおける出現数を示し、「出現比率」とは全段落においてその語が使用された段落数の比率を指す。「就職体験記」では、自身をも登場人物の一人として書く三人称形式のケースライティングとして記述することを求めた。このため執筆者自身のことであっても、「わたし」ではなく、「A子」という客体で記述するルールが敷かれている。したがって、いずれの年度をとっても「A子」が出現数1位となっていることは、課題の性質によるものである。

表2に就職活動体験と比較的関連の深いと

表2 2007年度－2009年度の頻出語の出現状況

2007			2008			2009					
順位	構成要素	構成要素数	出現比率	順位	構成要素	構成要素数	出現比率	順位	構成要素	構成要素数	出現比率
1	A子	481	54.23%	1	A子	1261	68.98%	1	A子	1380	69.70%
2	就職活動	309	34.84%	2	就職活動	703	38.46%	2	就職活動	880	44.44%
3	自分	284	32.02%	3	自分	636	34.79%	3	自分	730	36.87%
4	企業	251	28.30%	4	企業	595	32.55%	4	企業	681	34.39%
5	面接	230	25.93%	5	面接	511	27.95%	5	説明会	518	26.16%
6	私	188	21.20%	6	会社	399	21.83%	6	面接	505	25.51%
7	説明会	155	17.47%	7	説明会	360	19.69%	7	会社	366	18.48%
8	会社	142	16.01%	8	私	315	17.23%	8	何	322	16.26%
8	人	142	16.01%	9	人	302	16.52%	9	人	313	15.81%
10	内定	138	15.56%	10	内定	287	15.70%	10	気持ち	307	15.51%
11	事	135	15.22%	11	何	284	15.54%	11	参加	298	15.05%
12	時	122	13.75%	12	今	266	14.55%	12	今	297	15.00%
13	今	115	12.97%	13	時間	255	13.85%	13	内定	296	14.95%
14	今	114	12.85%	14	中	253	13.84%	14	時	292	14.75%
15	中	108	12.18%	15	参加	230	12.58%	15	中	277	13.99%
16	気持ち	101	11.39%	16	気持ち	228	12.47%	16	方	260	13.13%
17	時間	98	11.05%	17	日	226	12.36%	17	日	244	12.32%
18	話	97	10.94%	18	時	212	11.60%	18	時間	235	11.87%
19	B子	81	9.13%	19	方	185	10.12%	19	選考	215	10.86%
20	参加	79	8.91%	20	話	174	9.52%	20	キャリア支援センター	211	10.66%
21	日	78	8.79%	21	相談	166	9.08%	21	話	208	10.51%
22	方	77	8.69%	22	気	161	8.81%	22	興味	200	10.10%
23	相談	75	8.46%	22	結果	161	8.81%	23	私	199	10.05%
24	学校	72	8.12%	24	周り	155	8.48%	24	相談	191	9.65%
25	気	69	7.78%	25	B子	149	8.15%	25	Bさん	190	9.60%
25	本当	69	7.78%	26	不安	145	7.93%	26	気	188	9.49%
27	就職	65	7.33%	27	電話	141	7.71%	27	不安	187	9.44%
28	緊張	64	7.22%	28	緊張	139	7.60%	28	仕事	185	9.34%
28	結果	64	7.22%	29	事	138	7.55%	28	大切	185	9.34%
28	次	64	7.22%	30	学校	137	7.49%	30	事	183	9.24%

表3 頻出後の3年間の変遷

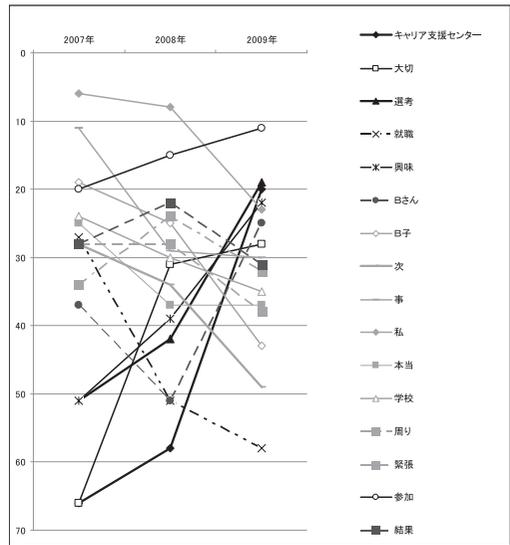
キーワード	2007年	2008年	2009年	変動幅
A子	1	1	1	0
就職活動	2	2	2	0
自分	3	3	3	0
企業	4	4	4	0
説明会	7	7	5	2
面接	5	5	6	1
会社	8	6	7	2
何	13	11	8	5
人	8	9	9	1
気持ち	16	16	10	6
参加	20	15	11	9
今	14	12	12	2
内定	10	10	13	3
時	12	18	14	6
中	15	14	15	1
方	22	19	16	6
日	21	17	17	4
時間	17	13	18	5
選考	51	42	19	32
キャリア支援センター	66	58	20	46
話	18	20	21	3
興味	51	39	22	29
私	6	8	23	17
相談	23	21	24	3
Bさん	37	51	25	26
気	25	22	26	4
不安	31	26	27	5
仕事	35	33	28	7
大切	66	31	28	38
事	11	29	30	19
結果	28	22	31	9
周り	34	24	32	10
電話	31	27	34	7
学校	24	30	35	11
本当	25	37	37	12
緊張	28	28	38	10
B子	19	25	43	24
次	28	34	49	21
就職	27	51	58	31

思われる語を網掛けして強調表示した。いずれの年度においても、「面接」や「説明会」あるいは「内定」といった体験についての記述が多いことがわかる。

頻出語の3年間の変遷は表3のとおりである。変動幅として3年間の順位之差の最大値を表示した。特に就職活動と関連が深いと考えられる語は「就職活動」「企業」「説明会」「面接」「会社」「気持ち」「参加」「内定」「時間」「選考」「キャリア支援センター」「興味」「相談」「不安」「仕事」「大切」「結果」「電話」「学校」等々である。このような上位語については表3において網掛けで示している。

特に変化の大きな語を図1に示す。

図1 頻出キーワードの順位変化(上位15項目)



2009年度にかけて出現順位が上昇したのものとして、「キャリア支援センター」、「大切」、「選考」、「興味」などの語を挙げることができる。

3. 2 擬似体験は自らの活動に活かされるか? 「遅刻」というキーワードに注目して

ここでは就職活動中の学生では珍しくない失敗として「遅刻」という語を含むテキスト(記述)について分析を試みた。年度ごとのサンプル数に差があるため出現数で単純比較することは難しいが、出現比率では「遅刻」というキーワードでの増加傾向が特徴的である。(表4参照)

表4 「遅刻」の出現状況

年度	順位	出現数	出現比率
2007年度	258	11	1.24%
2008年度	182	35	1.91%
2009年度	147	49	2.47%

表5 「遅刻」を含む段落の分類結果と年度ごとの比率（全92サンプル中）

出現回数

年度	クラスター									
	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10
全体	42	5	2	4	4	3	3	15	8	6
2007	2	1	0	3	1	0	1	3	1	0
2008	18	2	0	1	0	1	1	3	1	2
2009	22	2	2	0	3	2	1	9	6	4

出現比率

年度	クラスター									
	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10
全体	45.7%	5.4%	2.2%	4.3%	4.3%	3.3%	3.3%	16.3%	8.7%	6.5%
2007	16.7%	8.3%	0.0%	25.0%	8.3%	0.0%	8.3%	25.0%	8.3%	0.0%
2008	62.1%	6.9%	0.0%	3.4%	0.0%	3.4%	3.4%	10.3%	3.4%	6.9%
2009	43.1%	3.9%	3.9%	0.0%	5.9%	3.9%	2.0%	17.6%	11.8%	7.8%

表6 クラスターにおいて有意な構成要素

検定値※	クラスター									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
上位 1	到着	予定	したく	様	できず	お礼	帰り道	日さん	場合	間違い
上位 2	家	15分前	最寄駅	おかげ	企業説明会	説明	5分前	その後	経験	裏割
上位 3	乗り換え	原因	おばさん	下調べ	15分後	おばさん	状態	最終面接	印象	行動
上位 4	ホーム	10分前	余裕	目的地	ころ	最後	向かい	キャリア支援センター	特	大変
上位 5	会場	結局	1時間前	当日	上手く	印刷	頭	緊張	試験	みんな
上位 6	携帯電話	気持ち	日社	あらかじめ	遅く	建物		自分	大切	エントリー
上位 7	以上	何	30分前		Cさん			迷惑	筆記試験	開始
上位 8	電車				今日			部屋	前	記憶
上位 9	安心				Aさん			面接官	注意	合同説明会
上位 10	いくら				対応			電話	時点	授業
上位 11	ビル								就職活動	店員
上位 12	人身事故							きっかけ	交番	普段
上位 13	見							私	病院	内定
上位 14	出口							質問	試験会場	スーツ
上位 15	電話番号							把握		何事
上位 16	名前							面接		就職活動
上位 17	面接会場							ときに		話
上位 18	駅							周りに		参加
上位 19	内定							声		メール
上位 20	就職活動							時		
上位 21	おかげ							余裕		
上位 22	緊張							電車		
上位 23	質問							確認		
上位 24	様									
上位 25	話									
上位 26	私									
上位 27	場合									
上位 28	その後									

※期待値を超えて構成要素（キーワード）が出現する比率

「遅刻」が、それぞれの段落でどのようなに使われているのか、その文脈ではどのようなことが記述されているのか分析するために、「遅刻」のキーワードを含む段落を抽出し、その文章中で「遅刻」と共に現れる言葉を探した。ここでは一般的に使われる助詞などの語句や、極端に出現数の少ない語（2

回以下）を除外して対応分析を行った。さらに類似の文章を10のクラスターに分類した。（「遅刻」を含む段落の分類と出現数と率については表5を参照されたい。）

それぞれのクラスターの有意な構成要素（キーワード）の要約は表6に示すとおりである。

サンプル数の多いクラスター01, 08, 09の3クラスターが全サンプルのうちの70.7%を占めていた。クラスター01は「交通機関と関連した遅刻」である。クラスター08は「遅刻した、あるいはしそうになった」ことにより短大のキャリア支援センターに迷惑をかけたことや試験前に緊張を高めてしまったりした事例から抽出されたことを示唆している。クラスター09は「試験会場に到達するための事前準備の必要性」を訴える内容を含んでいる。いずれの記述も経年的に増加の傾向にある。

4. 考察

4. 1 頻出語の年度ごとの変化

「A子」「就職活動」「企業」「説明会」「面接」「会社」といったキーワードは毎年上位を占めるキーワードである。「面接」と「説明会」は就職活動の根幹であるが故に当然のことと言える。2007年度、2008年度と2009年度を比較すると「面接」と「説明会」の出現順位が逆転している。これは2009年度の求人数の減少による就職活動の長期化が影響して「面接」にいたらない学生が相当数いたためと考えられる。さらに「説明会」「面接」という語を含むテキストをより詳細に分析することにより、さらに年度ごとの就職活動の変化や就職活動に望む心境の違いを検出できると予想される。

4. 2 キーワードの出現推移と就職活動文脈上の変化とその対応について
頻出語としての出現比率では「遅刻」というキーワードでの増加傾向が特徴的であった。

「就職活動体験記」を用いたプログラムの価値は、就職活動の体験者である2年生の記述した体験記を読む、またその体験記を媒介として1年生が2年生にインタビューを行ったり、学年間でグループ・ディスカッションを行うなど幅広い展開と活用ができたところにある。双方の学年にとって他者とのコミュニケーションの訓練になることはもとより、2年次生には自己の体験の総括と人に教える技術の実践訓練となる。また1年生には就職活動へのリアリティが醸成されるきっかけとなることも、このプログラムの価値である。「学びのサポート」プログラムの中に組み込まれる「就職活動体験」ケーススタディが擬似体験として有効に機能すれば、1年生自らの就職活動にもそれが活かされるものと予測される。この取り組みを経年的に追跡するならば、年度を追って記述される内容の変化を捉えることが可能となるのではないかと考えられる。

「遅刻」を文脈に含むテキストの原文にあたると、2007年度の例では、「遅刻するも企業側の配慮により受験できた」、「内定をもら

表7 2007年度－2009年度の就職内定率の推移

	2007年	2008年	2009年
7月末日	77.2%	70.3%	42.2%
8月末日	85.1%	77.1%	50.0%
翌年3月末日(卒業時)	99.3%	98.8%	95.6%
(参考) 大卒有効求人倍率*5	2.14	2.14	1.62

表8 2007年度の遅刻に関するエピソードのうち、「遅刻したが問題とはならなかった」とする記述の例

A	「説明会の遅刻やエントリーシートの事を聞かれたらどうしよう」と不安になりながら選考を受けて行きました。不安とは裏腹に、Aさんは無事に最終選考にまで進む事が出来ました。
B	Aさんは予定時刻ぎりぎりに企業先にやっとのことで着きました。そこへ総務課のCさんがやってきて「今日は暑いね～大変だったでしょ」と冷たい麦茶をAさんに出しました。Aさんは冷たい麦茶を頂き「ありがとうございます」（ああ～間に合って良かった～）とほっと一安心をしました。
C	この経験から、遅刻をしても直接会社に行く事で熱意は伝わり印象に残る
D	この時彼女は時間を間違えるという大失敗をしてしまう。悔しかった。自分がゆるせなかった。電話をして遅刻をするという事を伝えた。相手側は快く時間をずらしてくれ、A子は面接へと向かった。
E	その企業からも内定通知を受けたA子は、二つの企業、どちらで決定をするか悩んだ。1つ目の企業は、最終面接で遅刻をしたのにも関わらず内定をもらった。
F	進んで行くと、男性の言っていたとおりの広い通りに出ることが出来、そこから地図を見ながら少し歩いたところで無事目的地に着くことが出来ました。予約時間を30分以上遅刻してしまい、テストを受けられるのか不安でしたが、受付の人に聞いてみたところ、次の回のテストを受けられると聞いて安心しました。そして無事テストも受けることが出来ました。

えた」などの「成功体験」として語られているものがあつた(表8に典型的な記述例を示す)。

2007年度の就職市場は、厳しいといつてもまだ学生にとって求人数の多い「明るい年度」であつた。このことと考へ合わせると、「活動体験記」の共有にも反面教師的な示唆が含まれていることがわかる。つまり、「遅刻」などの失態が直接に響かなかつたという「体験記」が、同様の失敗を犯してしまつても「そのことだけで、自分からその後に残されたチャンスまで放棄することはない」など教訓を含んだアドバイスとして書かれている事例があるということである。このようなアドバイスが効果をもつていた2007年度のような環境もある一方で、経済情勢と連動して変化著しい就職市場では「先輩」の体験談に含まれる情報の普遍的な有効性をどのように確認し担保するのかという課題が残されることとなつた。つまり、ある時期の学生にとって有効であつた行動方略、もしくはある場面で決定的な失点とならずに済んだ「遅刻」のよう

な事項が、別の環境・文脈でも通用するとは限らないという点で、ケーススタディ用テキストの提供には課題が残る。このような事項については、むしろ「就職体験記」から擬似・成功体験を得ることで代理的に強化される行動傾向を、アンラーニングする教示も必要(*6)となる場合もあり、慎重さが求められる。

5. 今後の課題

5.1 「就職活動体験記」活用の有用性

本研究では「就職活動体験記」の頻出語と関連・共変用語のクラスターを探索したが、今回のような調査の中からも、年度ごとの推移や変化が読み取れることが示された。こうした調査を繰り返してデータを蓄積することで、さらに有効な教育プログラムを開発する手がかりが得られる可能性が示されたと言える。今回は代表的な例として「遅刻」をキーワードとして、各年度のテキストを分析した。その結果、年度毎に同一ではない就職市場の

環境的推移を見極めて運用する方法を調整することは、ヒューマン・オペレーションに帰属するものであることを確認した。事例の表現や内容構成の中には読み取るべき「教訓」としては難解なものも含まれていることがあり、すべての学生にとって必ずしも有用性の高い擬似先行体験とならない危険性も示されていた。

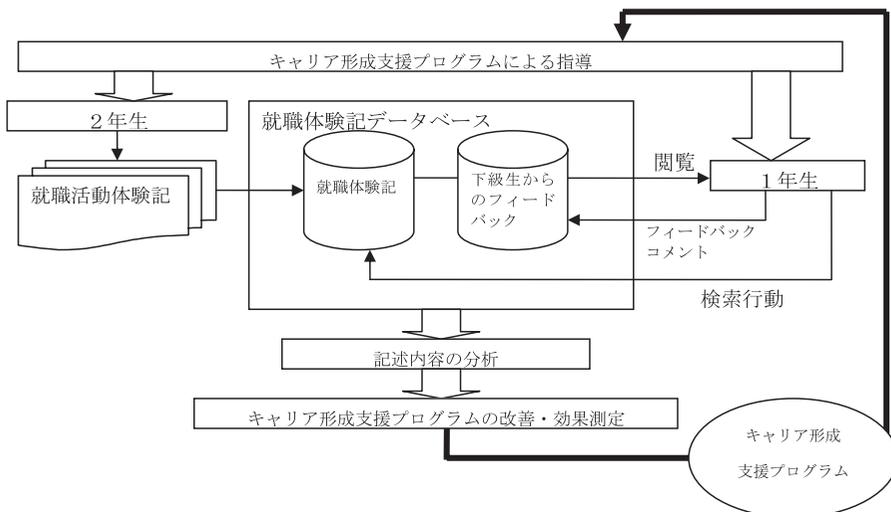
「就職活動体験記」を用いたプログラムは、現状では学年間のコミュニケーションの活性化の学習目標達成に専ら寄与している。就職活動の擬似体験の事例テキストとして、これらを学生に与える場合は、就職活動に向けた「先輩」の動き方や感情体験の記録を、読者となる後輩の学生が自分の先行知識・情報としてどのように役立たせるのか、予め考えさせる必要もあり、指導者による活用方法の教示・介入の手続きを挿入する方がよいと考えられる。

5. 2 学習ポートフォリオの蓄積とデータベースの有用性と活用に向けて

現在も蓄積され続ける学生の「就職活動体験記」は、就職市場に身をおいた学生でなければ作成できない貴重な資料であり、歴代の学生に活用されるべきテキストである。このような学習ポートフォリオの活用方法としては、多面的なキーワードでの検索を可能にするデータベースとして（構内限定型で）公開することも考えられる。後輩や同輩がキーワード検索によって他学生の個々のケース文書を閲覧し新しい視点を得ることは、これまでにないキャリア支援場面における「ピア・サポート」の1つの形となるはずである。従来の教職員の指導・支援と併せて学生の就業に向けた準備活動を促進し、「勇気づける」効果が期待される。

キャリア教育・支援に携わるスタッフの側からは、学生が就職活動やキャリア形成活動

図2 学生の自発的情報検索と学生間コミュニケーション活性化するシステムを核としたキャリア形成支援プログラムの概要



の過程で直面しがちな諸課題や感情体験を知る手がかりとなる。教育・支援スタッフがイメージする学生像と現実の（年度毎に変遷する）学生の実像との間に起こる齟齬や乖離の実情を拾い出し、必要な支援調整を可能にするシステムの構築も強く求められている。年度ごとの学習ポートフォリオに含まれる重要なキーワードは、経年的に推移するものであり、それらを含むデータベースが適正に機能を維持し続けるためには、常時刷新することが必要となる（図2参照）。この基礎となるデータの分析作業も、分析手法を含むシステムの安定化まで必ずしも容易ではないが、キャリア支援プログラムの効果測定指標として寄与する可能性があり、詳細な取り組みを継続することも価値がある。若年者就業支援のための教育は客観的で厳格な自己点検の工程をも含んで、常に調整と刷新・継続がなされるべきであろう。今後も、学生自身の執筆による「就職活動体験記」そのものの経年的観測とデータの蓄積と内容から見る「就職市場動向」の追跡、さらに学生の閲覧に供する教育システムに載せるべきデータベースの構築に向けた試行を今後も継続する。

6. 引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省.『生涯キャリア支援と企業のあり方に関する研究会報告書』について
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/07/h0720-6.html> (2010-1-8参照)
- 2) 厚生労働省.「若者の人間力を高めるための国民運動」.
http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/wakachalle/pdf/data_1.pdf. (2010-1-8参照)
- 3) 川上善郎・川浦康至・柴内康文 (2007).

就職活動における社会的リアリティの形成過程 日本心理学会第71回大会（東洋大学）

- 4) 杉本 英晴. 大学生における「就職しないこと」イメージの構造と進路未決定-テキストマイニングを用いた検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 55号. 2008. p77~89
- 5) リクルートワークス研究所. 「大卒求人倍率調査_時系列推移_全体 (2010年卒)」.
<http://www.works-i.com/>. (2010-1-8参照)
- 6) 戸部良一・寺本義也・鎌田伸一・杉之尾孝生・村井友秀・野中郁次郎. 失敗の本質—日本軍の組織論的研究. ダイヤモンド社. 1984

7. Summary

Higher education organizations face common problems regarding helping young people into work and supporting their independence. In such a circumstance, the systematization of information based on the experiences of students who have actually been in the employment market is possible to be effective for younger students.

The present study examines the possibility of first year junior college students, who are on the cusp of beginning their job search, being given written records of the practical experiences of second year students, who are currently actively seeking out post-college employment. An examination of words that occurred frequently in the empirical reports submitted by the job seekers, of the context in

which those words appeared, and of related words that co-varied with frequently occurring words, identified certain ambivalent terms, such as “lateness”, which suggest there is a need to consider the changes or transitions such terms undergo as a result of the situation of the employment market, and whether use of these terms would be effective or adverse for inexperienced first year students. Hints to the emotional experiences of the reporter were found in both the frequently occurring terms and the contexts in which they were found. The possibility and potential value of the future construction of a database system from which students could learn independently were confirmed.

The results also suggest that the construction of an independent learning database for students would make the collection of data for further analysis in this field more effective.

本研究は科研費（10011029）の一環として行われたものである。